

2022.5.22

ご報告：5/21 第 33 回働学研（博論・本づくり）研究会

十名 直喜

昨日（5/21）、働学研の第 33 回月例会が開催され、3 時間余（14 時前～17 時過ぎ）にわたり熱い議論が交わされました。

ご参加いただきました下記 26 名に、お礼申し上げます

（敬称略：井手、井本、岩田、太田、小野、片山、金井、聴涛、木林、熊坂、櫻井、佐藤、澤、杉山、田中、程、冨澤、中谷、波多野、濱、平松、藤岡、古橋、堀、横田、十名）

第 33 回働学研は、2 部編成で各 3 本ずつ計 6 本の発表がありました。

第 1 部 地域、地方、社会の文化的・民主的創造（司会：太田）

第 2 部 変革期における科学・技術・品質管理のあり方（司会：濱）

6 本の作品は、いずれも興味深く、臨場感と迫力がありました。それに誘われて、多様な質問や意見が出され、本質に迫る議論がなされたと感じています。

5/21 第 33 回働学研プログラム

（司会：太田・濱・十名、画面：澤 & 発表・議論各 15 分：計 30 分/本）

第 1 部 地域、地方、社会の文化的・民主的創造（司会：太田）

杉山友城：「杉山編[2022]『新しい＜地方＞を創る—未来への戦略』晃洋書房」

古橋敬一：「地域創造の理論と実践（再論）」

冨澤公子：「長寿社会をけん引する「学びあい育ちあうアクティブシニア」の消費行動と持続可能な幸福社会への道」

第 2 部 変革期における科学・技術・品質管理・人材戦略のあり方（司会：濱）

澤 稜介：「近代の科学と技術のあり方を考える—M.バーマン『デカルトからベイトソンへ』をふまえて」

堀 隆一：「QC サークル活動とその他の改善活動」（堀[2021]『日本の勤労・勤勉思想の系譜』）

太田信義：「技術変革を迎える自動車産業での人材戦略 —アウトソーシング活用の視点から」

それぞれの発表と議論については、＜付記 1 発表&議論のポイント＞をご覧ください。実に興味深い議論がなされています。電子メールでの深いコメントも紹介しています。

なお、次回の 6/18 第 34 回働学研などについても、＜付記 2 6、7 月働学研のお知らせとお願い＞をご覧ください、

どうかよろしく申し上げます。くれぐれもお大事に。

<付記1 発表&議論のポイント>

杉山さんの発表は、杉山編[2022.3]『新しい<地方>を創る』晃洋書房の趣旨とねらい、ポイントを紹介されたものです。大学、企業、行政にまたがる書き手11人の多様性を生かす編集の苦労と面白さ。地方を「ふるさと」と読み替え、幸福度の高さなど福井県の魅力と課題を提示。原発銀座を抱えるリスク視点から幸福度を捉え直すとどうかなどで議論。

古橋さんの発表は、10年前の博論「地域創造の視点と実践」新たな視点から再編集し単著書として出版する構想を提示されたものです。まちづくりの理論・政策・運動を図式などで可視化。「まち」を「つくる」を分離・考察して独自に再結合。実践編では複数の定点観測(10数年前と現在)比較。「主体」の実態と理想の乖離、その修復論などをめぐり議論。

冨澤さんの発表は、長寿社会の創造に向けてアクティブシニアのライフスタイルのあり方を日米比較視点も入れて提示されたものです。アクティブとは何か。人口減少社会のペシニズムをどう変えていくのか。世界一の長寿社会の反面、働きがいは最下位で幸福度も低い、年金・健康など格差・貧困など光と影の両側面をどう捉えるのか、などをめぐり議論。

澤さんの発表は、近代の科学と技術のあり方について、デカルト、ニュートンに立ち返り、ものところ、事実と価値、「もの」観察をめぐる「みる」と「みられる」等の両面から考察。「リアル」とは何か。17世紀に問われ、ICTの電子空間との比較で問い直す。アリストテレスの原子論と量子力学の電子論、人工物≒直線≒科学<対>自然&アート等の議論。

堀さんの発表は、企業のQC活動や改善活動をめぐり、その理念と手法、成果、逸脱と衰退などについて、歴史的&倫理的視点から考察されたものです。QC活動に対する欧州人の目。米国TQC(組織・業務)と日本TQC(人・自主)の違い。世界トップの日本TQCが世界品質管理標準になぜならなかったのか。トヨタシステムと日本の衰退、等も議論。

太田さんの発表は、自動化・電動化など百年に一度の技術変革を迎える自動産業の人材戦略について考察。危機感がトヨタ系でも弱いことに警鐘を鳴らす。危機感の弱さは何故か。経営風土・組織か、国の政策の遅れか。リスクリングをめぐり、議論沸騰。人材育成が企業グループの中にとどまるのは何故か。社会的・公的な政策対応の遅れにどう対処するか。

メールでの感想・コメント

① 波多野 進 2022.5.22

「今日はありがとうございました。たいへん大きな刺激を戴きました。

いつものようにたいへん充実して熱のこもったご発表が続き、高度な内容を短時間に圧縮して報告される方々もたいへんでしょうが、このレベルが維持されているというのも、ただその時間を楽しんでいるだけの私などの目には触れないところでの十名先生のご指導があつてのことと拝察申し上げます。

私もつい、熱が入って、手を挙げさせていただきました。短時間の質問だけでは意を尽くせなかったので、以下は補充です。

第1部では、お三方とも「地域の創造」には主体の問題があることを共通して示されたと思います。市民がどうしてまちの主人になりきれていないのか。主体性を喪失と言われるのは、いったい何故なのか。それが明確にならないと、行動もピンぼけになります。そ

のことに人口減とはつながりがあるのではないのでしょうか。逆に、人口減に対して具体的にどのように行動するのか、そこから「まち」の主人公への復権の道が開けると考えます。

富沢さんに食い下がったのも（ご迷惑だったかもしれませんが）そのために、子育てへの関与に高齢者の社会的役割があるというお答えをいただいてありがとうございました。これには完全に同意します。「協働」「合意」「創造」「学び合い」など耳に快い言葉で終わるのではなく、地域の人々が抱えるリアルな課題に焦点を当てて、これに正面から向きあうアクションを提示していかねばならないと思います。もちろん一朝一夕に成果が見えるようなことではないとしても。

第2部は、端的に科学技術と教育の問題でした。澤さんのご報告をうかがって、これからどのような方向に向かうのか、期待しています。前近代の終わりにトーマス・クーンの言う科学のパラダイムシフト起こりましたが、さらに近代の終わりには再びシフトが起こって現代科学が成立しています。われわれは前者のパラダイムシフトには何とか対応して、そのおかげで社会科学という思考様式が発展してきましたが、現代科学をもたらしただ後のシフトについては、社会理論側ではどう対応するのでしょうか。それがまだ不分明であるような気がします。西ヨーロッパ発の近代合理主義（またそれにもとづく「民主主義体制」およびその極端な変種である権威主義体制）の枠組みでは解けない貧富格差の拡大、人間環境の悪化は、社会科学にそのことを問いかけていると思います。

堀さんが提起された「ISOで日本の達成が世界の品質管理基準になれなかった理由」として、日本人の英語能力の不足をあげておられましたが、私は、それは問題の本質ではなくて、日本人の技術関係者が、欧米を向こうに回してこちらの実践を理解させるために必要な普遍的な言葉を持ち合わせなかった、端的に言うならば哲学的概念の用意がなかったからではないかと、愚考します。それは日本の教育の重大な欠陥でもあります。

そのことは、太田さんに質問申しあげた日本の企業がリスクリングを企業内でやるのが当たり前としてその社会化ができない理由、逆にいえば学校教育が信用されていない、企業の現場と国際競争場裡では使い物にならないと思われるような教育しかわれわれは受けてきていないということ、これとつながりがあります。」

② 小野 満 2022.5.22

「昨日は貴重なご報告ありがとうございました。

私は基本的に富沢さん主張に賛同します。ビーコンヒルビレッジのご紹介は貴重だと思います。このようなコミュニティを一日でも早く実現したいものです。

私は、労働力年齢(15—65歳) 高齢者年齢(65歳以上) 後期高齢者年齢(75歳以上)は実情に合っていないと思っています。少なくとも5歳引き上げるべきです。そのうえで前期高齢者と後期高齢者の区別が重要だと思います。

アクティブシニアとノンアクティブシニアとの区別、自分で活動できるシニアと意欲があっても自分単独では活動できないシニア。

先日も妻がコロナに感染して10日間外出を自粛したら、たちまち体力の衰えを感じました。

私は、76歳まで一戸建てに住みその後マンション暮らしですがこの差は強く感じます。日々以前の家の近隣の人の悲惨なニュースが入ってきます。今まで出来ていたことができないのです。それをどう助け合って援助するか。行動しやすい街にどう変えていくか。課

題は多いですが。今後のご研究の進展を期待しています。」

<付記 2 6, 7 月働学研のお知らせとお願い>

(1) 6/18 (土) 第 34 回働学研&卒寿記念講演のお知らせ

6/18 (土) 第 34 回働学研の発表は、すでに 6 本 (小林、堀、中野、小野、片山、平松) いただいています。満了となり、締め切らせていただきます。

前月の例会を待たずに満了となるのは、実に有難く嬉しいことで、これまでにない初の快挙です。

テーマは、イメージレベルでもよろしいので、できるだけ早くお教えてください。とりあえず、いただいている方も含め、仮で入れています。

なお、小野満さんが、6 月に満 90 歳を迎えられます。ご長寿、おめでとうございます。

今なお心身ともかくしゃくとされ、研究も活発なご様子。その極意は何か。卒寿を祝し記念講演をしていただく予定です。

小野 満：卒寿記念講演「未来を考えるために過去を振り返る—戦争と平和」

堀 隆一：「日本企業の品質不正と全体総括」

小林伸孝：「企業組合と協同労働の新地平」

片山勝己：企業内学校論の体系化 (博論) に向けて

中野健一：「『日本経営学の成立』再論」

平松民平：「『サステナビリティの経営哲学』を読んで」

(2) 7、8 月の働学研のお知らせとお願い

なお、7 月以降の発表申し込みも受け付けています。

発表サイクルは、まさに十人十色。また同じ人でも、時期によってかなり異なるようです。早めにお申し込みいただき、それをめざして積み上げていく。忙しい方ほど大切なことでは、と思います。よろしく申し上げます。